

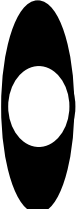
必死で6本の牙の間隙へと身を滑らせる.....光に向かって。今や巨大な怪物は無防備なあごの下を見せていた。英雄は今一度剣を繰り出し、そのやわらかい皮膚に刃を深く突き立てる。上顎と下顎を刺で貫かれた怪物はもう口を開けることはできない。なにしろ英雄お墨付きの聖剣だ。奴がいかに不たろう。

もう尊厳は残っていない。魔王が幾度でも蘇ろうとも、永劫に怪物に消化され続けるだけだ。さあ、王都へ戻ろう。



# 英雄の帰還

## 結末一撃



1 「実に、美に見事だ.....も知らぬ英雄よ」

聖剣に貫かれた身体を震わせながら、魔王が呻く。ここは大迷宮の最深处、魔王の間だ。勝利を確信した英雄は剣を鞘に納める。恐ろしい敵だったが.....キルは既に使い果たし、HPも大きく削られてしまった。だが、ついに世界は救われた。平和が戻ってきたのだ。しかし、奴は塵と崩れ落ちながら、不吉な言葉を残した。「だが忘れるな。我はすぐに再び繰り、更なる力を得るだろう.....その時こそ、真様の最期だ」

魔王の死体を調べるのなら 11へ進め  
この玄室を探ってみるのなら 3へ進め  
即座にここを出るつもりなら 6へ進め

切ル



### 12

あの角を曲がればもう出口のはずだ。うっすらと明るいののはきっと陽の光が差し込んでいるに違いない。しかし、そこで一歩も動けなくなってしまふ。背後から凄まじい妖気が迫ってくるのだ。魔王との戦いで感じた戦慄.....！震える身体を無理やり捻じ曲げ、振り返る。そこには先ほど倒したはずの敵が立っていたのだ。その目が怪しい光を放つ。「さあ、再び戦おうではないか.....復活した私の力は以前の比ではない。今度は真様が死ぬ番だ.....！」

その言葉通り、敵は数段強くなっている。戦力が何らかの理由で増強されていない限りは、勝つことはできない。英雄は魔王の前に屈し、世界の希望は潰えることになろうだろう.....



### 10

迅速に迷宮攻略を進めてきたため、これまでに聞いた音の数も少ない。既に折られた▽を3つまで戻すことができる。また、折られた▽が2つ以下だった場合は、余った分まで今後の音を打ち消すこともできる。

しかしそれは、踏み入っていない場所があるということの意味する。そこに潜んでいた敵と出会わないよう、折りながら進むしかない。地上へ向かっていると、まだ降りたことのない階段が視界に入った。

階段は無視して出口へ向かうのであれば 4へ進め  
この階段の下にあるものを確かめたいのなら 9へ進め

### 11

これで倒し切れていないとなれば一大事だ。床に残った塵の塊を調べてみる.....ただの砂だ。魔力の欠片ものごちゃいらない。倒れたと見せかけて、魔王は未だ生きているのかもしれない。

その時、玄室に低い音が響いた。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の玄室を詳しく調べるのなら 3へ進め  
ここから出ていくのなら 6へ進め

切ル



さあ、怪物に消化される前に脱出しなければならぬ。この出会いの間に鳴った響きの数は3回だ。今は12へ進め

仲間が増えた。彼は元四天王の一人だ。それなり戦力になる。今後、敵と戦うことに7を引いたパラグラフへ進むことができる。

3 魔王の部屋にこれは風魔景だ。今倒したのは本当に魔王だったのだろうか？ そんな疑心かわいてくる。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の亡骸——塵の山だ——を調べると 11へ進め  
ここから出ていくのなら 6へ進め

### 8

そう、英雄は既に最強状態。LvはMAXで魔王に挑んだのだった！ 全ての敵を狩り尽くしてきたということは、この迷宮の隅々まで巡ったということでもある。道に迷うことなく出口へ向かうのではないか。4へ進め

### 9

階段の下は薄暗い部屋だった。魔族特有の気配を感じ、武器に手をかける。魔王との戦いでもう体力も敵しいが取られるわけにはいかない。しかし相手は両手あげた。戦う気はないということらしい。例の音が迷宮に響く。

「魔王は不死身の化け物を魔力で支配下に置き、そいつを居城にしていたのさ。主を失った今、怪物は自由だ.....俺たちはその腹の中ってわけさ。このままじゃ遠からず食われちゃうぜ」

そいつは笑みを浮かべながらそう言った。なぜさっさと逃げなかったのかと英雄が聞くと、奴は答える。「魔王の奴が死んだと確信が持たなかったからさ。だがお前の姿を見てわかった。俺を支配していた魔王はもういないのだとな。戦って消耗しているんだろう？ 一緒に行かせてくれ。恩を返したい」

こいつを信用するのであれば 2へ進め  
魔族は例外なく敵だというのなら 7へ進め

### 6

ここは迷宮の最深处だ。1歩踏みだすと同時に、獣の唸りのような重低音が響く。この迷宮に踏み入ったときから、時折聞こえていた音だ。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——これは今、響いた音の回数だ——折ること。

これから先、同じように音が響いてくるたび、その回数だけ同様のことをしなければならぬ。ただし、これ以上折れる▽がなくなってしまうときには、これをしなくてもよい。

### 7

魔王の言うことなど信用できない。例の音が2回響く間に何とか敵を倒すことができた。この勝利でレベルアップしたため、攻撃力がUPした。

今後、敵と戦うことになったら、そのパラグラフ番号からラッキー7を引いたパラグラフへ進むことができる。今は12へ進め

### 4

敵目も降らずに地上を目指す。例の音が3回鳴る間、ひたすら走り続ける。12へ進め

### 5

魔王は再び英雄の前に倒れた。この戦いの最中に、3回

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王は再び英雄の前に倒れた。この戦いの最中に、3回

### 3

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

### 2

仲間が増えた。彼は元四天王の一人だ。それなり戦力になる。今後、敵と戦うことに7を引いたパラグラフへ進むことができる。

### 1

「実に、美に見事だ.....も知らぬ英雄よ」

聖剣に貫かれた身体を震わせながら、魔王が呻く。ここは大迷宮の最深处、魔王の間だ。勝利を確信した英雄は剣を鞘に納める。恐ろしい敵だったが.....キルは既に使い果たし、HPも大きく削られてしまった。だが、ついに世界は救われた。平和が戻ってきたのだ。しかし、奴は塵と崩れ落ちながら、不吉な言葉を残した。「だが忘れるな。我はすぐに再び繰り、更なる力を得るだろう.....その時こそ、真様の最期だ」

魔王の死体を調べるのなら 11へ進め  
この玄室を探ってみるのなら 3へ進め  
即座にここを出るつもりなら 6へ進め

もう尊厳は残っていない。魔王が幾度でも蘇ろうとも、永劫に怪物に消化され続けるだけだ。さあ、王都へ戻ろう。

### 13

必死で6本の牙の間隙へと身を滑らせる.....光に向かって。今や巨大な怪物は無防備なあごの下を見せていた。英雄は今一度剣を繰り出し、そのやわらかい皮膚に刃を深く突き立てる。上顎と下顎を刺で貫かれた怪物はもう口を開けることはできない。なにしろ英雄お墨付きの聖剣だ。奴がいかに不たろう。

### 11

これで倒し切れていないとなれば一大事だ。床に残った塵の塊を調べてみる.....ただの砂だ。魔力の欠片ものごちゃいらない。倒れたと見せかけて、魔王は未だ生きているのかもしれない。

### 10

迅速に迷宮攻略を進めてきたため、これまでに聞いた音の数も少ない。既に折られた▽を3つまで戻すことができる。また、折られた▽が2つ以下だった場合は、余った分まで今後の音を打ち消すこともできる。

しかしそれは、踏み入っていない場所があるということの意味する。そこに潜んでいた敵と出会わないよう、折りながら進むしかない。地上へ向かっていると、まだ降りたことのない階段が視界に入った。

階段は無視して出口へ向かうのであれば 4へ進め  
この階段の下にあるものを確かめたいのなら 9へ進め

その言葉通り、敵は数段強くなっている。戦力が何らかの理由で増強されていない限りは、勝つことはできない。英雄は魔王の前に屈し、世界の希望は潰えることになろうだろう.....

### 12

あの角を曲がればもう出口のはずだ。うっすらと明るいののはきっと陽の光が差し込んでいるに違いない。しかし、そこで一歩も動けなくなってしまふ。背後から凄まじい妖気が迫ってくるのだ。魔王との戦いで感じた戦慄.....！震える身体を無理やり捻じ曲げ、振り返る。そこには先ほど倒したはずの敵が立っていたのだ。その目が怪しい光を放つ。「さあ、再び戦おうではないか.....復活した私の力は以前の比ではない。今度は真様が死ぬ番だ.....！」

その言葉通り、敵は数段強くなっている。戦力が何らかの理由で増強されていない限りは、勝つことはできない。英雄は魔王の前に屈し、世界の希望は潰えることになろうだろう.....

今後、敵と戦うことになったら、そのパラグラフ番号からラッキー7を引いたパラグラフへ進むことができる。今は12へ進め

### 7

魔王の言うことなど信用できない。例の音が2回響く間に何とか敵を倒すことができた。この勝利でレベルアップしたため、攻撃力がUPした。

### 6

ここは迷宮の最深处だ。1歩踏みだすと同時に、獣の唸りのような重低音が響く。この迷宮に踏み入ったときから、時折聞こえていた音だ。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——これは今、響いた音の回数だ——折ること。

これから先、同じように音が響いてくるたび、その回数だけ同様のことをしなければならぬ。ただし、これ以上折れる▽がなくなってしまうときには、これをしなくてもよい。

魔王との戦いで随分消耗している。回復薬も切れた。これ以上敵と出くわさなければいいのだが。

魔王と戦う前に全ての敵を倒していたのなら 8へ進め  
万全の状態と魔王と戦うため、無駄なく迷宮攻略をしていたのなら 10へ進め

### 5

魔王は再び英雄の前に倒れた。この戦いの最中に、3回

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

### 4

敵目も降らずに地上を目指す。例の音が3回鳴る間、ひたすら走り続ける。12へ進め

### 3

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の部屋にこれは風魔景だ。今倒したのは本当に魔王だったのだろうか？ そんな疑心かわいてくる。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の亡骸——塵の山だ——を調べると 11へ進め  
ここから出ていくのなら 6へ進め

### 2

仲間が増えた。彼は元四天王の一人だ。それなり戦力になる。今後、敵と戦うことに7を引いたパラグラフへ進むことができる。

「実に、美に見事だ.....も知らぬ英雄よ」

### 1

聖剣に貫かれた身体を震わせながら、魔王が呻く。ここは大迷宮の最深处、魔王の間だ。勝利を確信した英雄は剣を鞘に納める。恐ろしい敵だったが.....キルは既に使い果たし、HPも大きく削られてしまった。だが、ついに世界は救われた。平和が戻ってきたのだ。しかし、奴は塵と崩れ落ちながら、不吉な言葉を残した。「だが忘れるな。我はすぐに再び繰り、更なる力を得るだろう.....その時こそ、真様の最期だ」

### 13

必死で6本の牙の間隙へと身を滑らせる.....光に向かって。今や巨大な怪物は無防備なあごの下を見せていた。英雄は今一度剣を繰り出し、そのやわらかい皮膚に刃を深く突き立てる。上顎と下顎を刺で貫かれた怪物はもう口を開けることはできない。なにしろ英雄お墨付きの聖剣だ。奴がいかに不たろう。

もう尊厳は残っていない。魔王が幾度でも蘇ろうとも、永劫に怪物に消化され続けるだけだ。さあ、王都へ戻ろう。

魔王の死体を調べるのなら 11へ進め  
この玄室を探ってみるのなら 3へ進め  
即座にここを出るつもりなら 6へ進め

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

### 11

これで倒し切れていないとなれば一大事だ。床に残った塵の塊を調べてみる.....ただの砂だ。魔力の欠片ものごちゃいらない。倒れたと見せかけて、魔王は未だ生きているのかもしれない。

その時、玄室に低い音が響いた。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

今後、敵と戦うことになったら、そのパラグラフ番号からラッキー7を引いたパラグラフへ進むことができる。今は12へ進め

### 7

魔王の言うことなど信用できない。例の音が2回響く間に何とか敵を倒すことができた。この勝利でレベルアップしたため、攻撃力がUPした。

### 6

ここは迷宮の最深处だ。1歩踏みだすと同時に、獣の唸りのような重低音が響く。この迷宮に踏み入ったときから、時折聞こえていた音だ。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——これは今、響いた音の回数だ——折ること。

これから先、同じように音が響いてくるたび、その回数だけ同様のことをしなければならぬ。ただし、これ以上折れる▽がなくなってしまうときには、これをしなくてもよい。

魔王との戦いで随分消耗している。回復薬も切れた。これ以上敵と出くわさなければいいのだが。

魔王と戦う前に全ての敵を倒していたのなら 8へ進め  
万全の状態と魔王と戦うため、無駄なく迷宮攻略をしていたのなら 10へ進め

### 5

魔王は再び英雄の前に倒れた。この戦いの最中に、3回

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

### 4

敵目も降らずに地上を目指す。例の音が3回鳴る間、ひたすら走り続ける。12へ進め

### 3

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の部屋にこれは風魔景だ。今倒したのは本当に魔王だったのだろうか？ そんな疑心かわいてくる。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の亡骸——塵の山だ——を調べると 11へ進め  
ここから出ていくのなら 6へ進め

### 2

仲間が増えた。彼は元四天王の一人だ。それなり戦力になる。今後、敵と戦うことに7を引いたパラグラフへ進むことができる。

「実に、美に見事だ.....も知らぬ英雄よ」

### 1

聖剣に貫かれた身体を震わせながら、魔王が呻く。ここは大迷宮の最深处、魔王の間だ。勝利を確信した英雄は剣を鞘に納める。恐ろしい敵だったが.....キルは既に使い果たし、HPも大きく削られてしまった。だが、ついに世界は救われた。平和が戻ってきたのだ。しかし、奴は塵と崩れ落ちながら、不吉な言葉を残した。「だが忘れるな。我はすぐに再び繰り、更なる力を得るだろう.....その時こそ、真様の最期だ」

### 13

必死で6本の牙の間隙へと身を滑らせる.....光に向かって。今や巨大な怪物は無防備なあごの下を見せていた。英雄は今一度剣を繰り出し、そのやわらかい皮膚に刃を深く突き立てる。上顎と下顎を刺で貫かれた怪物はもう口を開けることはできない。なにしろ英雄お墨付きの聖剣だ。奴がいかに不たろう。

もう尊厳は残っていない。魔王が幾度でも蘇ろうとも、永劫に怪物に消化され続けるだけだ。さあ、王都へ戻ろう。

魔王の死体を調べるのなら 11へ進め  
この玄室を探ってみるのなら 3へ進め  
即座にここを出るつもりなら 6へ進め

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

### 11

これで倒し切れていないとなれば一大事だ。床に残った塵の塊を調べてみる.....ただの砂だ。魔力の欠片ものごちゃいらない。倒れたと見せかけて、魔王は未だ生きているのかもしれない。

その時、玄室に低い音が響いた。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

今後、敵と戦うことになったら、そのパラグラフ番号からラッキー7を引いたパラグラフへ進むことができる。今は12へ進め

### 7

魔王の言うことなど信用できない。例の音が2回響く間に何とか敵を倒すことができた。この勝利でレベルアップしたため、攻撃力がUPした。

### 6

ここは迷宮の最深处だ。1歩踏みだすと同時に、獣の唸りのような重低音が響く。この迷宮に踏み入ったときから、時折聞こえていた音だ。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——これは今、響いた音の回数だ——折ること。

これから先、同じように音が響いてくるたび、その回数だけ同様のことをしなければならぬ。ただし、これ以上折れる▽がなくなってしまうときには、これをしなくてもよい。

魔王との戦いで随分消耗している。回復薬も切れた。これ以上敵と出くわさなければいいのだが。

魔王と戦う前に全ての敵を倒していたのなら 8へ進め  
万全の状態と魔王と戦うため、無駄なく迷宮攻略をしていたのなら 10へ進め

### 5

魔王は再び英雄の前に倒れた。この戦いの最中に、3回

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

### 4

敵目も降らずに地上を目指す。例の音が3回鳴る間、ひたすら走り続ける。12へ進め

### 3

△が全て折られているのであれば、外への道は目の前で閉じられてしまう。巨大な落とし戸が落ちてきたのだ。闇の間の中で二枚の舌と化した床がうねり、英雄の身体は迷宮の奥へと投げ出される.....。再び塵と化した魔王ですらも、満足げな唸りを漏らしたのだった。

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の部屋にこれは風魔景だ。今倒したのは本当に魔王だったのだろうか？ そんな疑心かわいてくる。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

魔王の亡骸——塵の山だ——を調べると 11へ進め  
ここから出ていくのなら 6へ進め

### 2

仲間が増えた。彼は元四天王の一人だ。それなり戦力になる。今後、敵と戦うことに7を引いたパラグラフへ進むことができる。

「実に、美に見事だ.....も知らぬ英雄よ」

### 1

聖剣に貫かれた身体を震わせながら、魔王が呻く。ここは大迷宮の最深处、魔王の間だ。勝利を確信した英雄は剣を鞘に納める。恐ろしい敵だったが.....キルは既に使い果たし、HPも大きく削られてしまった。だが、ついに世界は救われた。平和が戻ってきたのだ。しかし、奴は塵と崩れ落ちながら、不吉な言葉を残した。「だが忘れるな。我はすぐに再び繰り、更なる力を得るだろう.....その時こそ、真様の最期だ」

### 13

必死で6本の牙の間隙へと身を滑らせる.....光に向かって。今や巨大な怪物は無防備なあごの下を見せていた。英雄は今一度剣を繰り出し、そのやわらかい皮膚に刃を深く突き立てる。上顎と下顎を刺で貫かれた怪物はもう口を開けることはできない。なにしろ英雄お墨付きの聖剣だ。奴がいかに不たろう。

もう尊厳は残っていない。魔王が幾度でも蘇ろうとも、永劫に怪物に消化され続けるだけだ。さあ、王都へ戻ろう。

魔王の死体を調べるのなら 11へ進め  
この玄室を探ってみるのなら 3へ進め  
即座にここを出るつもりなら 6へ進め

この場にいる者は誰も彼も逃れることはできない。そして全てを飲み下した巨大な怪物が響をわずかに開き、恐ろしい音を響かす。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音が響く。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

### 11

これで倒し切れていないとなれば一大事だ。床に残った塵の塊を調べてみる.....ただの砂だ。魔力の欠片ものごちゃいらない。倒れたと見せかけて、魔王は未だ生きているのかもしれない。

その時、玄室に低い音が響いた。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——響いた音の回数だ——折ること。

今後、敵と戦うことになったら、そのパラグラフ番号からラッキー7を引いたパラグラフへ進むことができる。今は12へ進め

### 7

魔王の言うことなど信用できない。例の音が2回響く間に何とか敵を倒すことができた。この勝利でレベルアップしたため、攻撃力がUPした。

### 6

ここは迷宮の最深处だ。1歩踏みだすと同時に、獣の唸りのような重低音が響く。この迷宮に踏み入ったときから、時折聞こえていた音だ。表紙裏、あるいは裏表紙裏の▽を1つ——これは今、響いた音の回数だ——折ること。

これから先、同じように音が響いてくるたび、その回数だけ同様のことをしなければならぬ。ただし、これ以上折れる▽がなくなってしまうときには、これをしなくてもよい。